



亀倉雄策〈東京オリンピック 公式ポスター〉第2号、第1号、第3号
(フォトグラファー:早崎治、フォトディレクター:村越義) 1962年、1961年、1963年



岡本信治郎〈インディアンが2人……〉(10人のインディアンより) 1964年
一般財団法人駒形十吉記念美術館蔵(当館寄託)



1964年の日本は高度経済成長の真っただ中。オリンピックという国際的イベントを控えた東京は、建設ラッシュで街の様相を大きく変えつつありました。他方、芸術の分野では古い体制や社会の矛盾に反旗を翻す前衛的な表現が隆盛していました。そのような熱気ある時代に生み出された表現とはどのようなものであったのでしょうか。東京と新潟という2つの地域をテーマに、1964年の美術の諸相を所蔵品で展観する本展の見所をご紹介します。

東京: 亀倉雄策とオリンピック・ポスター

新潟県西蒲原郡吉田町(現・燕市吉田)出身の亀倉雄策(1915-1997年)がオリンピックのシンボルマークを任せられることになったのは1960年、45歳の時です。第2次世界大戦中は「日本工房」で活躍し、戦後は「日本宣伝美術会」の設立(1951年)や結成されたばかりの「国際デザインコミッティー」(1954年)に参加するなど、30代にして日本のデザイン界を牽引する彼の活躍ぶりからすれば、少しも驚くことではありませんでした。東京オリンピックのシンボルマークは、河野鷹思、永井

一正、田中一光、杉浦康平、稲垣行一郎、そして亀倉雄策の6名のデザイナーによる指名コンペで決定されましたが、亀倉の作品はシンプルかつ力強いデザインで他を圧倒したといわれています。シンボルマークに続き依頼された3種のオリンピック・ポスターでも、亀倉はその才能を遺憾なく発揮します。シンボルマーク以上のデザインは難しいと考え、オリンピック史上初めて写真を使用したポスターを制作したのです。こうして作られた第2号(1962年)、第3号(1963年)ポスターとシンボルマークの第1号ポスターを合わせて3枚のポスターを連続で掲示する、いわゆる“連続貼り”を想定したデザインの巧さも相まって、亀倉の東京オリンピック・ポスターのインパクトは、半世紀以上経った今日でも色褪せない輝きを保ち続けています。

展覧会では、これらのポスターに加え、シンボルマークのデザインスケッチや写真撮影風景を記録した貴重な資料もあわせて展示し、その魅力を振り返ります。

会期: 2020年1月25日(土)~3月22日(日)

新潟: 長岡現代美術館の誕生

東京-大阪間に東海道新幹線が開通した1964年、上越新幹線はまだ影も形もありませんが、1962年に特急「とき」が開業し、上野-新潟間は4時間40分と大幅に短縮されました。その新潟では、オリンピック開催直前の1964年6月6日から11日まで第19回国民体育大会春季大会(新潟国体)が開催され、大いに盛り上がりを見せます。ところが、直後の6月16日に新潟県粟島南方沖を震源としたM7.5の大地震が襲い、夏季大会は中止となりました。そんな状況下の同年8月2日、長岡に新たな美術館が誕生します。「長岡現代美術館」は大光相互銀行の社長だった駒形十吉(1901-99年)のコレクションを基に開館した私立美術館でしたが、新潟では初めての本格的美術館で、また「現代」を冠した日本で最初の美術館として話題となりました。

駒形のコレクションは近代洋画の黎明期から同時代美術まで幅広く、中でも長岡現代美術館といえば、招待作品の中から公開審査で大賞を決める「長岡現代美術館賞」(1964-68年まで5回開催)が注目を集め



横山操〈TOKYO〉 1968年

ました。初回の1964年は26人の日本人が招待され、審査員として招聘された土方定一、針生一郎、中原佑介によって岡本信治郎が大賞に選ばれました。招待された作家の多くがその後も第一線で活躍したことを考えると、同展の意義は決して小さくないでしょう。

今回の展示では、来春に取り壊しが決定している旧長岡現代美術館の建物とそこに今も残る斎藤義重のレリーフにも焦点を当てて、同館の歴史が人々の記憶と記録に残ることを願っています。

(主任学芸員 濱田真由美)



「第1回長岡現代美術館賞」審査風景

館長所感

長い間お休みをいただいた近代美術館にようやく展覧会が帰ってきました。準備に忙しかった美術館のスタッフ一同にとって、待ちに待ったリニューアル・オープンです。

1年2カ月ぶりに開催となった展覧会は、リニューアル・オープン記念コレクション展「新潟の美術 小特集 横山操」です。「近代美術館の名品」と併せ、2つのコーナーで構成しました。

なおこの展覧会は9月15日に開幕した「第34回国民文化祭・いがた2019第19回全国障害者芸術・文化祭にいがた大会」の応援事業として企画しました。

「新潟の美術」は新潟県出身作家の作品を集めました。日本画では小林古径、土田麦僊、岩田正巳ら多数。横山操は《炎炎桜島》など大作を中心に5点展示しました。洋画では小山正太郎、牧野虎雄、佐藤哲三ら、最近収蔵した高村真夫の《倦怠》も修復が済んでご覧になれます。工芸では人間国宝の佐々木象堂や三浦小平二、彫刻の千野茂、羽下修三も目を引きます。「近代美術館の名品」ではカミーユ・クロード、クロード・モネ、モーリス・ドニ、オーギュスト・ロダン、藤田嗣治、岸田劉生、佐伯祐三らの秀作が展示されています。ぜひ一度、ゆっくりご鑑賞願っています。

多くの皆様のご協力により大切な工事が完了しました。環境が整った美術館というキャンパスに、素晴らしい展覧会の花を咲かせるのが私たちの使命です。今まで以上に楽しく、感動してもらえる展覧会を追求していきます。

(館長 木村哲郎)



高村真夫〈倦怠〉 1921年
※2018年度新収蔵

編集部からのひとこと

美術館のリニューアルにあわせて、雪椿通信もリデザインを行いました。このリデザインプロジェクトは、長岡造形大学の4名の学生が、視覚デザイン学科山本敦教授のご指導の下、進めてくれました。初代館長が決めた「雪椿通信」のロゴだけは絶対に変えないという唯一の、しかし難しい制約があったにも関わらず、手取りやすく、フレッシュな雪椿通信が出来上がりました。この場を借りて、長岡造形大学関係者の方々にお礼を申し上げます。ありがとうございました!
(美術学芸員 松本奈穂子)

新潟県立近代美術館だより 雪椿通信 第52号
編集・発行 THE NIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART
新潟県立近代美術館
〒940-2083 新潟県長岡市千秋3丁目278-14
TEL0258-28-4111(代) FAX0258-28-4115
https://kinbi.pref.niigata.lg.jp/
公式ツイッター @niigata_kinbi
制作・印刷 株式会社 山田写真製版所
〒950-0064 新潟県新潟市東区松島1-5-14
リデザイン 長岡造形大学 太田朝陽、畔上祐香、大浦有夏、田中雄大
発行日 2019年10月30日

展示室

Exhibition room

ペアガラス化

これまで企画展示室前のガラス壁は、一枚ガラスによるものでした。御存知のように、一枚ガラスは、外界の熱の影響を受けやすく、夏暑く、冬寒く結露する状況となり、近接する企画展示室への影響も少なからずありました。企画展示室の環境保全、安定化のため、今回の改修でそのガラス壁を一枚ガラスから、断熱と紫外線をカットしたペアガラスに変更しました。それによって館内の温度変化の影響等の低減を図り、展示環境の安定化を進めました。

展示ケース

当館は公開承認施設※1でもあるため、作品の展示、保存には細心の注意を払っています。展示環境の保全、より安定した環境が保てるよう展示室の壁面ケースを更新し、企画展示室の一面をエアタイトケース※2に変更するなど、展示室の温湿度の管理等、さらに一層の作品環境の保全を図ります。

※1 公開承認施設：国宝や重要文化財の指定文化財を展示する展示環境が整っている施設であることを文化庁から認められた施設。
※2 エアタイトケース：気密性が高く、ケース外の空気が入りにくいので、湿度の影響や粉塵、有害ガス、害虫などを防ぎ、ケース内の環境を一定に保つことができる。

照明

老朽化で不具合のあった照明の安定化と省エネルギーに対応するため、展示室の調光盤設備を更新しました。また、コレクション展示室のトップライト部の形状および、展示室の照明をLED照明に変更しました。これにより展示室の照明の安定化と作品への熱による影響を低減させ、展示環境の維持を図ります。

館内サイン

Signs in the museum

開館から25年の間に必要に応じて増えていった館内サインは、作られた時期によって、デザインが少しずつ異なっていたり、劣化したりしていました。今回、館内全体のサイン計画を見直し、見やすく、わかりやすいデザインに統一しました。



RENEWAL OPEN!



2F

美術館リニューアル

近代美術館は約1年間休館し、改修工事を行いました。目に見えない部分の工事が中心なので、一見すると何も変わっていないように思われるかもしれませんが、そこで、担当学芸員が今回の改修工事の概要をご紹介します。

(展示室、外壁、バックヤード：専門学芸員 松矢国憲／館内サイン、レストラン：美術学芸員 松本奈穂子)



1F

RENEWAL OPEN!

レストラン

Restaurant

当館2階のレストラン広告塔が、店主がご高齢のため休館を機に借しまれつつも営業を終了されることになりました。2001年4月の開店以来、企画展にあわせてオリジナルメニューをいくつも考案、それぞれの展覧会に思い出の味を作ってくださいました。長い間、ありがとうございました！

そして、再開館にあわせて新しいカフェ SAKURA TERRACEがオープンしました。お店のロゴマークはおとなり長岡造形大学の学生のデザインです。美術館にいらっしゃった際には、ぜひおいしいお食事と一緒に楽しみください。



バックヤード

Backroom

美術作品を守るため、美術館内の展示環境、保存環境は常に一定であり続けることが望めます。その心臓部であるのが空調設備です。特にカビの発生を防ぐには温湿度管理が何よりも重要です。25年経って空調設備の熱源装置の耐用年数超過や不具合等も生じ、デリケートな作品の保全が危うい状況となってきたため、館内の温湿度をコントロールし続けるためにも空調設備更新を行いました。併せて一時保管庫の空調設備を独立させ、保管作品の管理が細やかにできるように改善しました。

外壁

Outer wall

美術作品を守るため、劣化・汚損させる外的要因から隔離され、美術館内の展示環境・保存環境は常に一定であり続けることが望めます。美術館の建物は、日射しや風雨、そして雪など、春夏秋冬の気候の変化から館内環境を守るため堅牢でなければなりません。しかし、当館も25年の経年劣化と、日々の風雨や冬期間の凍結等による外壁ブロックの落下防止、ひび割れによる建物の劣化進行を止めるために、タイルの補修・補強や、上面に笠木を設置し、改修を行いました。

